

浄

monthly JODO

土

2015
June

6



河童

陶芸家
南
初枝
の作品

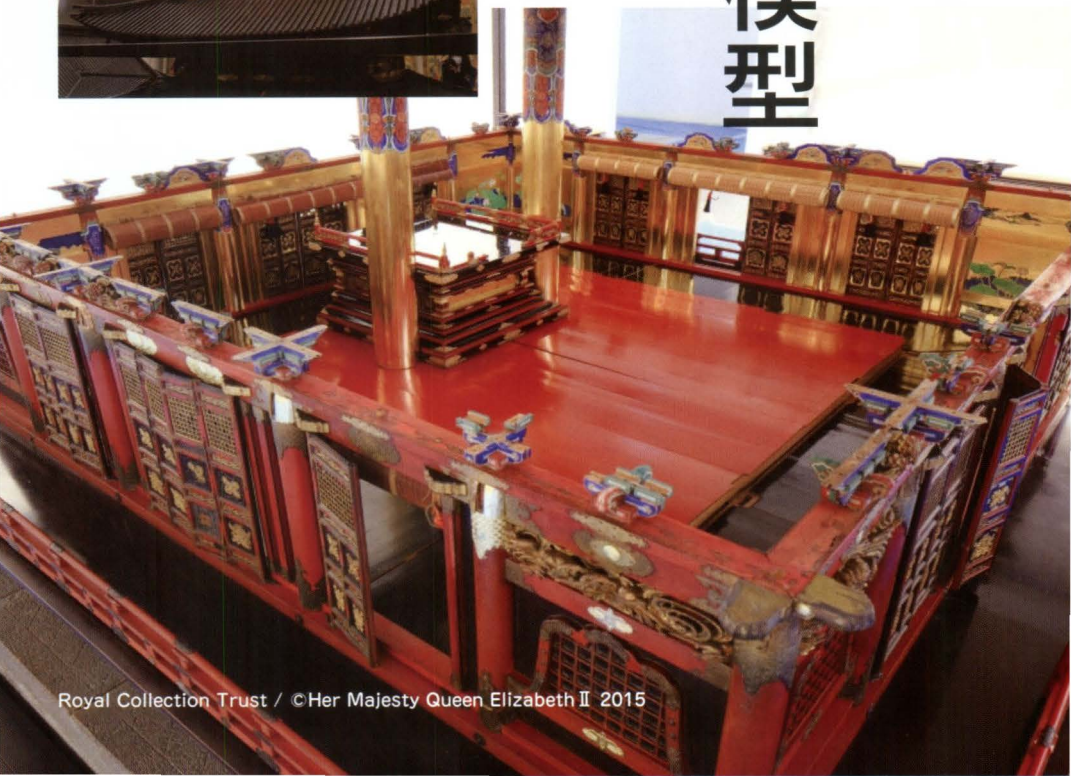
河童は水辺の妖怪とも、未確認生物ともいわれる。北斎や国芳あるいは清水崑が描いているが、姿かたちには諸説あり、胡瓜が好きとか悪戯好きとかいうこと以外、性格も明確には掴めていない。芥川龍之介の『河童』は人間社会への批判に満ちた小説であり、彼の自死と密接な関係があるといわれている。

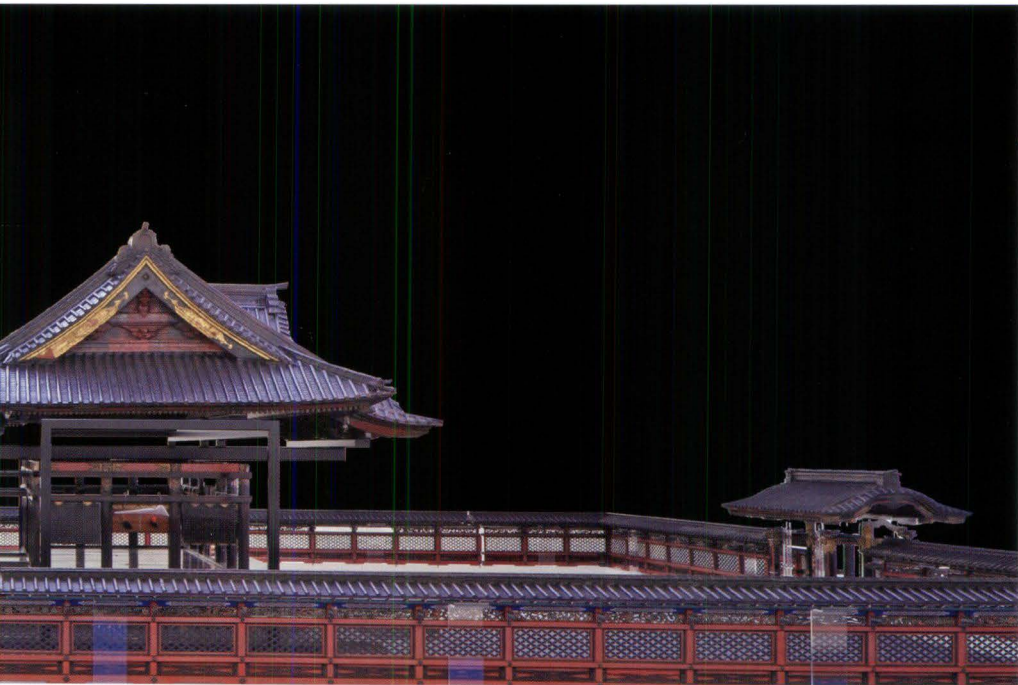
さて、今月の陶芸は河童の箸置である。作者は河童をこのように表現した。剽軽で少し怠惰な様子。梅雨時。この箸置に割り箸を置いて、かっぱ巻でも食べるとするか。

(佐々木美冬)

撮影・芝崎慶三

甦る江戸の技
台徳院殿靈廟模型
エリザベス2世女王
陛下から増上寺へ





Royal Collection Trust / ©Her Majesty Queen Elizabeth II 2015



英国と日本の橋渡し役となった
徳川宗家第十八代 徳川恒孝氏。
渋谷区のご自宅にて。



模型発見の立役者となったウィリアム・コールドレイク ハーバード大学建築博士と氏が理事長を務める法人のジェネラル・マネージャーでもある坂田洋子さん。ちなみに洋さんは氏の奥様でもある。後ろは宝物展示室がある増上寺大殿。



台徳院殿靈廟模型。右から中門、拝殿、相之間、本殿。



1996年4月3日、英国シュロップシャー州アッチャム市英国文化財保存財団倉庫で、台徳院殿靈廟模型の本殿来迎柱を手にするコールドレイク教授。



展示室、展示方法をプロデュースした森美術館の学芸グループシニア・コンサルタント広瀬麻美さん。美術展の企画などを行う浅野研究所の代表でもある。

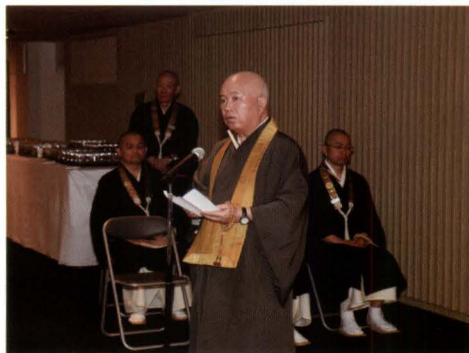


見事に修復され展示された台徳院殿靈廟模型。
Royal Collection Trust /
©Her Majesty Queen Elizabeth II 2015



展示室公開の前に行われた開白法要では
増上寺法主 八木季生台下が導師を務め
られた。(写真提供 増上寺)

徳川家康公没後400年の記念事業として
「増上寺宝物展示室」を実現させた友田
達祐執事長。(写真提供 増上寺)



浄土

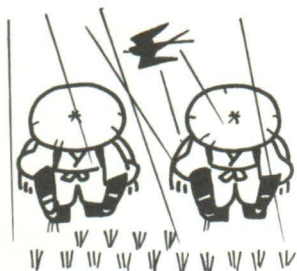
2015/6月号 目次

カラーグラビア 甦る江戸の技 台徳院殿霊廟模型	1
連載 法然上人のお言葉⑬	梶村 昇 英訳 河西良治 6
講演概録『法然上人の仏教に生きる』	梶田真章 8
連載 会いたい人 春風亭小朝さん①	関 容子 16
連載 響流十方	袖山榮輝 24
新連載 東日本大震災の被災地を訪れて③	成田淳教 28
連載小説 渡辺海旭⑤⑨	前田和男 32
連載 友好の絆	森 清鑑 38
甦る江戸の技 台徳院殿霊廟模型	真山 剛 43
連載 誌上句会	選者=増田河郎子 48
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう 51
編集後記	52

表紙・陶芸家 南初枝の作品

表紙裏=表紙の言葉

裏表紙裏=講演会 梶村昇+阿満利麿



表紙題字=中村康隆元浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

法然上人のお言葉

ご法語

僧尼の食作法は、もつとも然るべきなり。然りと雖も、当世は機已に衰え、食已に滅す。この分際をもつて一食は、心偏に食事を思い、念仏の心静まらず。菩提心経に云わく、食は菩提心を妨げず。心は能く菩提を妨ぐ。その上は自身を相計るべきなり。

（醍醐本『法然上人伝記』）

現代語訳―僧尼の食事の規則というのは、尤もなことであるが、当世は、人の資質もすでに衰え、その規則もすでに廃れている。このような状況で、一日に一食では、念仏をしている間も、食事のことはかり考え心が定まらない。『菩提心経』に「食事は菩提心を妨げない。貪る心が悟りを妨げる」とある。こういうことなので、自分をよく考えた上で調整すべきことである。

Honen Shonin's Sayings

Regulations for meals that monks and nuns must follow should be laid down in an appropriate way, but human temperaments have already gone down and the regulations have now been done away with. Such being the case, the Buddhist convention of one meal per day makes them go on thinking of their meals all day and lose their presence of mind while reciting the nembutsu. The Buddhist Scripture *Bodaiśingyo* says that meals themselves do not disturb aspiration for Buddhahood but greed for meals disturbs enlightenment. That is why you should be careful in arranging your habits of meals for yourselves. (*Daigo Version of the Biography of Honen Shonin*)

解説

仏教では、食事は一日に一食、それも午前中と決められております。それは仏教が暑い国で誕生したので、午後にまで食事を延ばすと、腐るといふことからできた規則だと思います。ところがその規則ができてしまうと、こんどは暑さなど関係のない所まで、それに縛られて、法語のようなことになってしまいます。

法然上人の教えも、八百年の昔のまま、今に当てはめようとするのは、上人に笑われてしまうのではないのでしょうか。その中から何を变え、何は变えられないかを分別する智慧と勇氣とが必要になります。

Commentary

The Buddhist community set down the rule of one meal per day, and in the morning at that. I think it is because Buddhism came into being in a hot country and food items were considered to go bad there if the mealtime was put off until the afternoon. However, once the rule was established, it bound down people even in places which had nothing to do with such hotness, and consequently it brought about such a situation as shown in the above saying.

The same will be true with Honen's teachings. If we try to apply them to the present without any changes of them, as they were eight hundred years ago, how could Honen resist laughing at us? It is necessary for us to have the wisdom and courage to make a distinction between what can be changed, and what cannot be changed, in his teachings.

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

英訳……

河西良治

中央大学文学部教授

■講演概録■

法然上人の
仏教に生きる

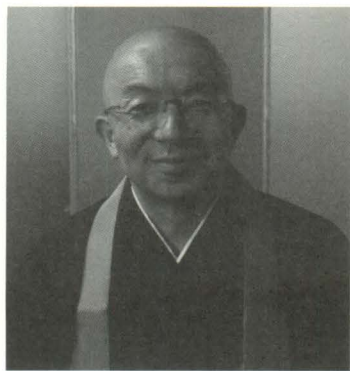
第二回

京都・法然院貫主

梶田真章

法然上人が「阿弥陀仏の本願は一切の生きとし生けるものを浄土に迎えて仏にするというものだから、浄土に往生する条件は寺を建てるとか、仏像を作るなどの財力のある人しかできない難しいことではなくて誰でもできる最も簡単な行為、即ち『南無阿弥陀仏』と唱えることである」との信心を定められて専修念仏を実践する浄土宗を開かれましたが、最近ではなかなか念仏を唱えさせていただけなくなりました。集まって祈るときは黙禱と仰われてしまいます。つまり黙って祈りなさいと強制されてしまいますから、そのような時に私はちっちゃな声で「南無阿弥陀仏」と唱えます（笑）。せつかく主催者が黙禱と仰っているのにと遠慮しながらですが、これが今の日本です。黙って祈るスタイルが定着致しました。それぞれの祈りを唱えるのではなくりました。

本当は唱えることで信心を育ててゆくのだと思います。『南無阿弥陀仏』を唱えることで阿弥陀仏への信心が深まってゆく、『南無妙法蓮華経』と唱えることでこれが力になっていく、というのが祈ることだと思っています。祈るとは、私の信じている解釈では「い・のる」、「い」とは神聖な言葉、「のる」とは述べるですから、「祈る」とは元々何か言葉を唱えないといけなかったのです。黙禱は関東大震災以降、第二次世界大戦を経て次第に定着していきます。黙禱が始まったのは関東大震災の一年後の追悼行事かららしいのです。想いなさい、唱えてはいけませんということになっているのが現代日本人の祈りでございます。ともかく『南無阿弥陀仏』を唱えさえすれば、どんな人間でも浄土に往生して仏になるというのが法然上人の仏教です。仏教におけ



る悟りへの道は要するに「戒定慧かいぢょうゑという三学をば過ぎず」、つまり戒めを保ち、心を定め、智慧を働かせる。これが仏教でいう修行ですね。様々な仏教各宗派における修行も全て戒定慧、どんな戒めを守って、心を定めて、仏さまの智慧を開発していくのか。これが仏教で言う三学です。仏さまのことを無学と申します。もう学ぶことがなくなったということ、仏教で無学というと仏さまのことです。だから、私には学問がないということは無学ではなく浅学と申します。

法然上人は、要は戒定慧というけれども、「私は一戒をも保たず、禪定において一つもこれを得ず」と述懐されました。戒はひとつも保てないし、心は定まらないし、当然、仏の智慧は働かない私である。これが私なんだ。私は、簡単に言うところ「三学の器うつぶせにあらず」というのが法然上人の自問自答でした。

こんな私にも相應しい成仏の道がある。それが次のテーマになって。それで発見されたのが本願念仏だったのです。私のような戒定慧を実践できない器の人間でも阿弥陀仏の本願が仏になることを保証して下さっているという本願念仏。凡夫が成仏するための唯一の教えです。これ以外にはありません。

ですから、他の方法で成仏できると思つているときは当然念仏なんか唱えたくないと思つるのが当たり前人間です。他に私にはできることがある、修行すれば私は変われると思つている限りは、念仏さえ唱えたら浄土に往生できるなどという教えはにわかには信じられません。私には他に実践できる修行があります、ちゃんと心は磨いていけるのですというのが私どもの誇りですから自力の方が信じやすい教えです。他力は実践するのは誠に簡単だけれども信じにくい。自分の心を自分でコントロールすることに絶望した、法然と親鸞

が選んだのが他力本願です。自分の心といっているけど、それが一番不可解である、謎である、いつまで経っても自由自在にコントロールすることなんてできない、それがこの世を生きていく私ではないか。それを素直に認めたのが法然と親鸞です。今は実践できないけれども、いつかはできるようなというのが自力で、それに期待したい。これが修行に生きる宗派で、決して法然上人はそれを否定されていません。一生信念強く修行できる方は修行に生きられたらいいのであって、「私にはできない」と法然は確認して浄土宗を開かれました。比叡山天台宗を否定されたものではありません。天台宗はいまでも修行によって成仏への道を歩もうとする素晴らしい一つの宗派です。できると思っている方は尊い方です。でも私にはできない。何故なら法然上人は「いまは末法だ」と時代を見つめました。仏教には正法、像法、末法と時代が変わってゆくという時代認識があります。お釈迦さまの時代から最初の五百年が正法の時代で、教えがあり、修行する人があって、悟る人がある。次の五百年あるいは千年間は像法の時代となり、教えがあり、修行する人はいるけれどもなかなか悟る人がでてこない。末法の時代になると、教えはあるけれども、修行することがままならなくなってしまう。つまり修行しても修行することが悟りへの道として意味を持たなくなるのが末法。というように仏教では時代の変化を考えました。

先ほど申し上げたように日本では一〇五二年に末法に入ったと信じられました。もちろん信じなかった人もいます。典型的な方は道元禪師です。今も正法であり、お釈迦さまの時代と変わることはない。法然上人より六十七歳年下の道元禪師は『正法眼蔵』という膨大な書を遺され、時代は今も正法であり、坐禅することそのものが仏さまの悟りの姿なのだ、ひたすら座ることを実践されました。

同じ時代を生きても自己の問い方がお坊さんによって違います。法然上人は、今は末法であって、修行をしても無意味であると、悟れる人なんかいないと、自分を含めて悟る人はいないと考えられて浄土宗を開かれました。同じ時代を生きても時代の受け取り方、自問自答がお坊さんによって全く異なります。様々な宗派の考え方の違いに触れていただいて御自身の在り方を問うていただければと思います。

法然上人は「私は決して聖者ではない、凡夫だ」と仰いました。それまでは人間には聖者と凡夫とがいるのだと、善人と悪人がいるのだという人間観でした。善人は修行して仏になる、悪人は地獄に行くしかない。八百年前の善人と悪人の区別の基準は仏教でした。仏の教えを守る人が善人、守れない人が悪人。即ち、自己の心をコントロール出来る人が善人、出来ない人が悪人。現代の日本では全く変わりがまして、法律が善悪の基準。皆様は自分は善人だと思っていちゃいます。法律を破っていないから、私は悪人ではない。八百年前は仏教が実践できないから私は悪人であると。だから私は地獄に行くしかないのだと、これが普通の日本人でした。悪人は極楽どころか、六道輪廻を続けるか、地獄に行くしかなかったのに、その悪人を成仏させるためにこそ浄土を構えられたのが阿弥陀仏だというお坊さんが出てこられました。これが法然上人です。「私のような悪人」と法然上人は自分を問われました。私は戒も実践できない、心が定まらない。それが私だ。よく考えたら、人はみな私と同じではないか。その同じ人が地獄に行くしかないと絶望している。その人々の希望となるのが他力本願。どんな人間でも『南無阿弥陀仏』さえ唱えれば浄土に往生して仏になる。これが希望だと。当時の人は浄土往生が希望だったので。なんとか私も目覚めたい、悟りたい。そこに登場したのが法然上人だったので。

法然上人までは人間を聖者と凡夫、善人と悪人で分けていた。別の言葉で言えば智者と愚者。当時の悪人、愚か者というのは凡夫ということですから、普通の人間ということです。いま皆さんが悪人というと特別に悪いことをした人ですが、当時は自分の心を自分でコントロールできない人、煩惱の塊カマ、それが当時の悪人。その凡夫の一人として私は生きていたというのが法然上人の問いかけであり、人はみんなそうなのではないかということに浄土宗の依って立つところがあります。そんなのは私は嫌でございませぬ、私を皆様と一緒にされては困ります、私はちゃんと煩惱をコントロールしていける人間なんです、修行をすれば心を磨けると思いたい方は自力修行を選ばばいいのです。

私は、愚者なのか智者なのか、「私は」ということで問うていって、どの宗派の信と行が私には相応しいのか。いまは末法か正法か。自分と時代と問うた結果で、どの宗派が正しいかではありません。自己の問い方によって自力か他力かを選んで生きるしかない。法然上人はそうして他力本願を選択されました。本願念仏を説かれていたのが中国の善導大師でした。『南無阿弥陀仏』を唱えることが阿弥陀仏の願いに順ずる行為だから、極楽往生は私がお願ひして阿弥陀仏がかなえるのではなくて、阿弥陀仏の本願に私が応えるかどうかが問われています。私が先にお願ひして阿弥陀仏が応えるのはありません。みんなを仏にしたいという阿弥陀仏の願ひ、本願に私の方が応えていくのだ。私その願ひを有難いと思うかどうか。そのような仏の願ひは要りませぬ、自分でなんとかしますと思うかどうか。これによって選ばれるのが他力本願ということになります。

「本願というは、阿弥陀仏の、いまだ仏に成らせたまわざりし昔、法蔵菩薩と申ししいにしへ」、つまり阿弥陀仏がまだ阿弥陀仏でなかつた頃に本願は立てられました。仏は最初

から仏ではなかつた訳で、菩薩として修行されて仏となられた訳わけでございませう。菩薩として願いをおこされて仏さまに成られるので仏さまにはそれぞれの願いがあります。阿弥陀仏は四十八の願いをおこされました。これが説かれているのが『無量寿経』でございませう。その四十八願の第十八願にどんな人間でも「南無阿弥陀仏」を唱えれば往生できると説かれていたといいますが、実は「無量寿経」には「唱えれば」とはひとつも書かれていません。「十念すれば」としか書かれていないのです。「乃至十念せんに」つまり十回でも心で念じたらば、としか書かれていなくて、口に唱えればいいよ、とは書かれていないのです。これを読みかえたのが善導大師でした。この十念とは十回「南無阿弥陀仏」と唱えることなのだと解釈されました。念ずると言われても、どれだけ念じたらいいのかわからない。これを口に出して十回唱えたらいいのだ、これさえすればいいのだ。つまり、阿弥陀仏はみんなを仏にしたいのだから、誰にでもできる最も簡単な方法を私達に教えて下さったのである、というのが善導大師の信心でした。これで十念が十回唱えることになりました。

「南無阿弥陀仏」はお経の中には『観無量寿経』に二回しか出てまいりません。『無量寿経』にも『阿弥陀経』にも「南無阿弥陀仏」という言葉は一言も出てきません。出てくるのは『観無量寿経』に二回だけで、臨終の間際に「南無阿弥陀仏」と唱えれば悪人も浄土にゆけるよ、ということが出てきます。『観無量寿経』の「南無阿弥陀仏」と『無量寿経』の十念を併せて解釈したのが善導大師のご功績でした。これで「南無阿弥陀仏」と十回唱えたら誰でも浄土に行けるといふ教えが確立しました。だから極端に言うとなら然・親鸞の仏教はお釈迦さまの教えではなく善導大師の教えによると言っても過言ではありませう。

ですから、「念仏は易きが故に一切に通ず。諸行は難きが故に諸機に通ぜず」、念仏は易

しいから一切に通じる、他の行は難しいから諸々の機には通じません。機というのはさっき言った凡夫か聖者か。これを仏教では機と申します。時をどう問うか、時代をどう問うか、そして人間の機すなわち器をどう問うか。凡夫か聖者か。本願念仏は末法の凡夫に相應しい教えだ、時機相應の教えだというのが法然上人の仏教です。

したがって法然上人の仏教でいうと「われらが往生は、ゆめゆめ、わが身のよしあしきにはより候まじ」。自身の善悪には依りませんと。「ひとえに仏の御ちからばかりにて候べきなり」。善人でも悪人でも阿弥陀仏の力によって浄土に行けるとするのが法然上人の仏教です。自分の力で行けると思う人にはとんでもない教えと映るかと思えます。

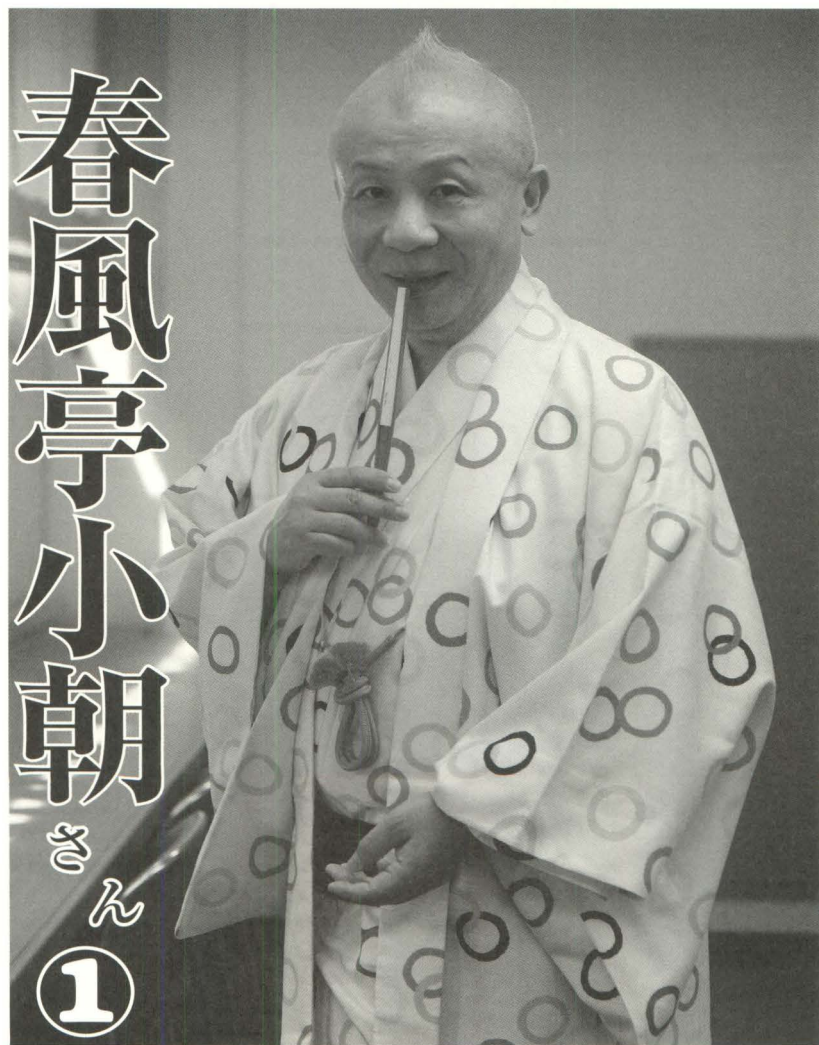
さっきから何遍も申し上げておりますが、人間は自己の心自体が自由にコントロールできない生きものではないかということを確認するのか、そうじゃないだろうと思うのか、この人間観の違いですと諍いを起こしてきました。

善悪を問いません。善人でも悪人でも念仏さえ唱えたら浄土に行くのですけれども、結果的に自分を善い人と思いたい方は修行を選択されますから、己を悪人と思う人が他力本願を選択するというのが法然・親鸞の仏教です。どんな悪人でも念仏を唱えたら浄土に行く、それが法然上人の仏教です。己を善人と信じたい方は他力本願を信じられませんが、いろいろ試してみたい、己の心をコントロールしてみたい、これこそが生きる道だと思方ですから、結果的に自分を善人と思う方は阿弥陀仏の本願を信じない方です。ひたすら念仏を唱えるのではなく、念仏も唱えておこうかという風に考えられますので、結局、己を悪人と信じた人こそ他力本願の信心に生きていくことができる。これが法然・親鸞の仏教だと思います。

(つづく)

連載

会いたい人
関容子



春風亭小朝

さん

①

撮影／タカオカ邦彦

小朝さんの高座は花があつて愉しい。

明快にトントン運ぶ口調、やや高め、耳に心地よい声の調子、そして何よりも、同時代を生きて世相を明確にとらえ、スバリと斬つてみせる批評性。そのさり気ない感じで言つてのけるセンスのよさが爽やかで、これが人気の理由だろう。

そして噺の枕には、憶えて帰つて受け売りをしたくなる、笑える話ができつとある。

たとえば、こんな具合。

国会議事堂に向つて、「〇〇総理のバカ！」と叫んだ男が捕えられる。不敬の罪ではなく、国家機密をもらした罪で……。

近ごろは恐山に行つても口寄せをする年輩の「いたこ」はいないで、若いアルバイトが目立つ。日が昏れて飲みに行くと昼間の女性。「あつ、君はさつき山にいた子？」……など。

小朝さんが二十五歳で三十六人抜き真打昇進を果たしたときは、大きな社会ニュースだった。この記録は空前絶後。志ん朝、談志も

これに及ばず、今も破られていないという。

当時、「横丁の若様」として話題を呼んだが、今年還暦を迎えた小朝さんも、大師匠として納まる感じはまったくなくて、若々しい雰囲気をもそのまま保っている。

まず、小朝さんはどんな家に育つたのか。

「父は、祖父の建設会社を受け継いで、つぶしてまた建て直したりという、落語の典型的な若旦那タイプで、お金を湯水のごとく使い、女遊びをし、飲み歩き……みたいな親父の一人息子が僕です。祖父自体も滅茶苦茶な遊び人でしたね。

うちはそのころ駒込でしたんで、上野は近いですがから親がしょっちゅう鈴木本演芸場へ連れて行つてくれました。僕は寄席へ行つても泣かない子で、あの独特の雰囲気が好きだったんだと思います。

最初の記憶はあの柳家三亀松師匠の色つばい都々逸。中味は全然わからないんですが、

昭和50年3月に鎌倉能舞台での鎌倉寄席の高座にあがった小朝さん。

(写真提供 鎌倉能舞台)



周りの大人たちの微妙な笑い方を見て、寄席というのは大人の社交場なんだな、と子供ころにもわかったわけです。こうして人が大勢笑っている中に身を置くことはすごく面白いことだと思ったり、生で聞こえてくる三味線に乗って次々に現れてくる不思議な芸人たちが、どこか悲しいようなかがわしいようなクセ者揃いで、そういう世界に僕は強く惹かれて行つたんだと思います」

父親の膝に乗ったまだヨチヨチ歩きの方やが最前列にいて、芸人が話しかけると臆せず受け答えをするのが周りに受けた、という話を何かで読んだが、小朝さんは生まれながらの落語の申し子だったのだろう。

「落語という芸の面白さを強烈に体験したのは、僕が小学校五年で、談志師匠の『芝浜』を聞いたときです。鮮やかなグリーン羽織で現れたこともよく憶えています。今思えば、師匠はトリでもなかったし、『芝浜』をやる立場じゃまだなかったと思うんですが、なぜ

か大ネタを話し始めて、僕は新宿末廣亭の二階で漸にすっかり引き込まれてソフトクリムをなめるのも忘れるくらい聞き惚れちゃって、畳がベトベトになつて、落語つてすごい！と思いました。

寄席ではほかにも好きな人がいっぱいできて、志ん朝師匠は中学の先輩だったりするし、小さん師匠もいいなと思つたけど、やっぱりすごいと思つたのは、文楽師匠でした。出てくるとき、引っこむときの様子とかが品があつて色気があつて、あの師匠だけ異質な感じで、ちよつとこの世の者じゃないようなところがあつて、不思議な人だな、と強く惹かれました。

それで高校入学を前にして弟子入りしたいという手紙を書きましたが、丁度そのころ師匠のところは前座がいっぱいで、落語界全体も新しい人を取らないようにしようという時期だったので、弟子入りは無理、という、多分お弟子さんが書いたんだと思いますけど、

丁重な断りのお手紙を頂戴しました」

当時、既に小朝さんはフジテレビの『しろ
うと寄席』で五週にわたって勝ち抜き、チャ
ンピオンの座を獲ち取るという素晴らしいキ
ャリアを持っていた。

「それで次なる弟子入り希望先がうちの柳朝
師匠でした。寄席では大抵最前列で見てもし
たから高座の出の着物がよく見える。帯とか
羽織の紐とか羽裏にも凝ってて、この人だけ
ちよつと違うというのが師匠選びの理由です。

幸い叔父がテレビ関係者で、親しかった末
廣亭の支配人さんに僕のことを言ってくれた
ので、わりとトントンと入門が決まりました。

師匠にまず『君のお母さんを連れて来なさい』
と言われて、末廣亭の横の喫茶店へ二人
で行ったら、すぐ弟子入りが許された。あと
でわかったんですが、お袋は師匠の『タイプ』
だったんですね（笑）。のちに鞆持ちとして
連れてつてもらおう飲み屋のママさんが、こと
ごとくうちの母親によく似ているの（笑）」

春風亭柳朝の高座を一度だけ見たことがある。
黒紋付袴姿、小肥りで汪洋とした風貌の
師匠が、「さつまさ」の出囃子で登場し、『宿
屋の仇討』を一席演じた。

あとで聞けば、これが柳朝十八番の演目で、
トリでこの囃を出すときは必ず黒紋付袴だっ
たということだ。

なお、小朝さんの出囃子は「さわぎ」。志
ん朝は「老松」、談志は「木賊刈り」と、い
かにもそれぞれの芸風とよくマッチしている。

「初めて師匠のお宅を訪ねた日、椎名町の駅
にこれから兄弟子になる一朝（当時朝太郎）
あにさんが迎えに来てくれて、どんどん路地
の奥へと案内してくれる。有名な巨人軍専門
の吉田接骨院の角を曲って、『ここだよ』と
言われたのが、まだこんなところが東京都に
あったんだ、という感じの、日蔭で暗くてじ
めじめした古い（笑）、物置きみたいな家。
狭いのに猫十匹も飼ってて、便所は汲み取り

式で、何この家……って感じ。高座の粋な姿とのあまりの落差に、茫然となりましたね。

師匠には子供がなかったんで、いつも僕をそばに置いときたかったのか、夕方出かけるのに午前十時に来い、って言う。でも、掃除や台所の手伝いをしようとすると、御夫婦で『そんなことはしなくていい』とおっしゃるんで、手持ち無沙汰でした。居間には万年炬燵たうちの横に万年床とこがあつて、師匠はいつも寝ころびながらずっとテレビを見てる。お昼には、おかみさんがウインナーを大皿一杯焼いて、お茶をドンと置いて『食べな』って。御飯は出ません。餃子だけとか、フライドポテトだけ、ってこともありました。

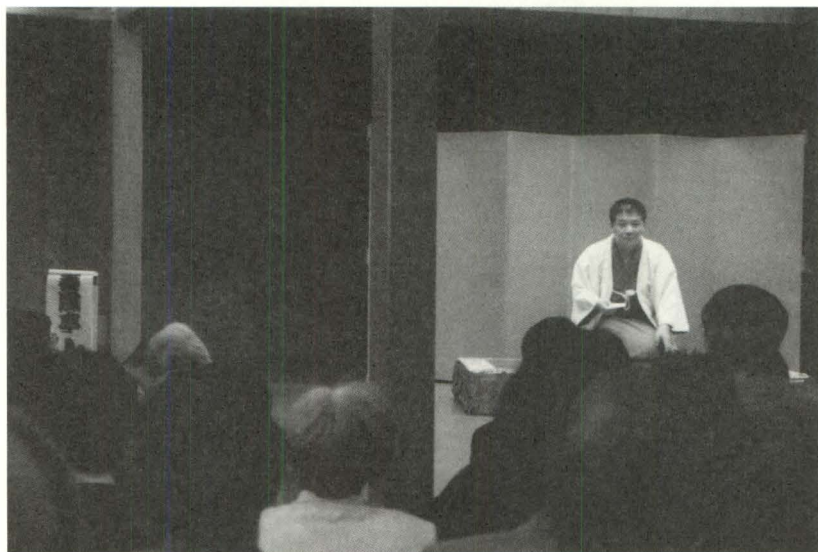
師匠のところでトイレは我慢するしかない。だって、師匠のいるすぐそばに薄い板戸があつて、開けたらすぐトイレですから丸聞こえじゃないですか。そこで用を足す神経は僕にはなかつたですからね。

ようやく四時ごろになると、師匠がむっく

り起き上がる。おかみさんが洗面器持つてくると、炬燵に入ったまま歯を磨いて、それからいい洋服に着替えて、高級な腕時計つけて、どンドン素敵な師匠に変身する。僕は高座着の荷物を持つてお供でやつと外へ出られる、といった一日でしたね。まあ、師匠の家に行動かない日は高校へ、という生活でした」

小朝さんの前座名は小あさ。初高座は由縁の深い新宿末廣亭だった。

「それがまだ前座の身分にもなっていないで、師匠から一席も教わっていない入門ほやほやのときです。うちの師匠は林家彦六師匠の総領弟子なんです、その大師匠の一門会が昼席にあつて、偉い人たちがまだ来てないときに、先輩のあにさんが僕にトップバッターに上がれ、って言うんです。もう高校の文化祭でいやというほど高座を経験してますから、怖いということはなかつたし、それで一席やりました、お客様が少ないわりにはよく受けた、という感じでした。でもこんなことは前



平成7年11月4日、「鎌倉能舞台25周年記念事業」一復活、鎌倉寄席一「談志・小朝 二人会」での小朝さん。左手奥に能舞台ならではの松が見える。
(写真提供 鎌倉能舞台)

代未間で、一席も習ってない人間を高座に上げるなんて、異例中の異例。あとで彦六師匠に知れたら、僕に上がれって言った人たちは、大目玉だったと思いますよ。うちの師匠も根柢帖を見てびっくりして、『狸賽』ってお前、これは二つ目以上がやる物で、前座は賽コロまで行かずに札さつに化けるところで降りるもんだ、って言われて、なるほど、とプロの世界を実感したりしましたね」

それにしてもちつとも悪びれない突貫小僧。小朝さんの著書に『こわさ知らず』というのがあるが、だからこそ快進撃できたとも言える。

ところでこのインタビューの準備で資料を集めながら、私は図書館に電話をして今回面

白い体験をした。「小朝の書いた本、ってありますか?」「は? 題名は?」「ですから『小朝の書いた本』」。

こんなところにも笑いが仕掛けてあったのか、と感心した。

とにかく小朝さんはいろんな才能の持ち主だ。

「高校では、演劇部と落研おちけんの部長をかけもちしていました。文化祭のとき、演劇部ではカミュの『異邦人』を翻案したり、精神病院を舞台にした、精神病のふりをしてるのを暴いていくみたいな芝居を書いてみたり。僕が作・演出ですから重要な役には出ませんけどね。教室で落語の独演会をすませて、次は何時からまたやります、って言うどターツと行列ができて、体育館へ行って芝居やって、また戻ってきてしゃべって……と忙しかつた。

そのころは役者になるか嘶家になるかで揺れ動いた時期で、大学は桐朋学園の演劇専攻に受かるんですが、それが決まったとき、た

またまうちの師匠がNHKの落語番組のアシスタント。しかもレギュラーの仕事を取ってきてくれたんです。ところが当時、桐朋では学生のテレビ・ラジオ出演は総て禁止で、すぐあとの大竹しのぶさんのときからOKになるんですが、僕のとときはダメでした。師匠に内緒で大学を受けてたんで、師匠に相談もできなくて。それで演劇の道はひとまず置いて、嘶家の修業に専念しようと決心したんです」

つまり、そのときは落語の神様からの愛され方が断然強かったのだろう。

しかし後年、芝居の神様のほうもかなり盛り返ってきて、平成二十六年のNHK大河ドラマ『軍師官兵衛』では、明智光秀という大役を演じて好評だったりさせている。

(この項つづく)

信を一念に生るととりて、行をば一形にはげむべしとすすむるなり。弥陀の本願を信じて、念仏の功をつもり、運心年ひさしくば、なんぞ願力を信ぜずというべきや。

法然上人〔登山状〕

信心は一遍のお念仏で往生すると心得、念仏行は一生涯にわたって励みなさい、とお勧めしているのです。阿弥陀さまの本願を信じ、称えたお念仏の功德が積み重なり、お浄土に心寄せる年月が久しいならば、どうして本願のお力を信じないなどと言えましょうか。

歴史が導く

その尼僧さんから「今晚あたり、ホタルが乱舞しそうだ。見に行こう。車出しとくれ」と言われたのは、もう二十年は前だろうか。まだ幼かった子どもと妻と尼僧さんを乗せ、長野市郊外の山の中の田んぼまで見に行つた。蛍光色の曲線があちらこちらで練り返し輪を描いていた。

信州善光寺の周辺には、尼僧さんを生み出してきた宗教文化がある。寺檀関係とは別の次元でそれぞれの地区に庵（リョウとも言い、公民館機能も備えていたはずだ）があり、地縁・血縁の誰かが尼僧（主に曹洞宗が多い）として修行し庵をお守りする。そして、その縁に連なる者は菩提寺が何宗であろうが、尼僧さんによる月参りを受け入れ先祖の供養をし、尼僧さんは、そのご家庭の、とりわけご婦人のよろず相談相手となる。結果、尼僧さんは親しみを込め、どこどこの「アンジョさん」「アンジュさん」、あるいは「アンちゃん」と呼ばれてきた。

この尼僧さんたちが大活躍するのが長野市仏教会による「花まつり」である。例年、月遅れの五月五日の開催だが、今年で九十三回。長野の目抜き通りを駒澤大学のプラスチックバンドがパレード、さらに稚児行列、善光寺境内での大法要、中心市街地のホールにおけるブラン演奏や落語口演など催し物が満載である。

当然、それなりの経費を要する。そこで仏教会では、五月五日に先立つ一日、二日の両日、約百軒のお宅に参上し、各家ご先祖供養の経を唱えてお布施を拜受する。いつの頃から、そうしてきているのだろうか。ともかく「行乞」と称し、仏教会僧尼が十数人ごと三コースに分かれて経を唱えて歩く。受け入れてくれるのは尼僧さんが月参り先とするお宅である。ここがまさに尼僧さんの出番で、行乞先を取り次いで下さってはじめて花まつりが開催可能となる。私は、その取り次ぎを取りまとめで行乞のコースを編成する。担当して二十年。しかし今、尼僧さんは高齢化してその数も減り、ホテルの尼僧さんもすでに仏の世界の人だ。

月参りに来る尼僧さんがいなくなったお宅に連絡を入れ行乞の取り次ぎをするのは、おのずと私の役割になった。年に一度、「そろそろ花まつりです」とお伺いを立てる。ご遠慮され、そこで縁切れとなるお宅も少なくない。かつては百五十軒回っていたから、今は三分の二だ。そんななか、ホテルの尼僧さんが取り次いでいたAさんのお宅は、尼僧さんが亡くなってもう十数年経つというのに、毎年、二つ返事で受け入れてくれた。今年もそうだった。

ところが今年、御快諾の返事をいただいた一時間後にお断りの連絡が来た。

行乞の予定日は家族の誰もが都合がつかず、どうしても留守になるというのだ。来年もまたご連絡申し上げる旨を申し上げ電話を切ったが、今回で縁切れかもしれない、そう思った。いや、よくぞこれまでお付き合いいただいたものだと思つた。それが、である。翌日、Aさんから再び連絡があつた。

「昨日は大変申し訳ありませんでした。五十年以上、毎年お参りいただいているものを、こちらの都合でお断りするとは大変心得違いのことを申し上げます。いたく反省しております。是非、いらして下さい。お願いします」

驚いた。感激した。人が歴史を作るのかも知れない。人が歴史を動かすのかも知れない。しかし、こつこつと積み上げてきたご家庭の歴史がそのご家族を導くことが確かにあるのだ。行乞当日、全員集合したご家族が待つておられ、例年どおり読経の声が響いた。

果して、私たちは念仏の声を自身の歴史として積み重ねているだろうか。念仏の声はすぐに消え去る。でも、それまで称えてきた念仏が本願を信じ切るように私たちを導いてくれる。「運心年ひさしくば」とは、そういうことだろう。それにしてもAさんご一家の姿、「アンちゃん、見たかい？」って教えてあげたいなあ。久しぶりにホテルを探してみたくなつた。

(袖山榮輝)

東日本

大震災 被災地 を訪れて

③ のを

成田淳教

東京世田谷感応寺住職
関東フロック浄土宗青年会理事長



浄土宗福島地区浜通り組青年会が主催する浜〇カフェの会場となったいわき市の仮設施設。

今年の四月十五日に福島県いわき市の浜^{はま}○カフエのお手伝いに行つてまいりました。

浜○カフエは浄土宗福島教区浜通り組青年会により、震災後から毎週水曜日に行われている活動で、いわき市内の仮設住宅等の集会所で行われています。

僧侶による傾聴活動という側面と、仮設住宅の方々の交流の場となつている側面があります。私は、これまでに数十回お手伝いに伺つていますが、初めのころはどのように接したらよいかわからず緊張しました。集会所で、実際にカフエが始まってみると、時々震災の話はできるものの、今現在の日常的な会話が主で、自坊の檀信徒の方々の集まりと似たような感覚でいたように思います。

はじめに教えていただいた、会話する上での注意事項は「当たり前のように家族のことなどを聞かないように」というものでした。例えば、お子さんが遊びに来た時に「今日はお母さんは？」などと聞いてしまうと、震災

でお母さんがお亡くなりになっているケースもあるからというものでした。

今回の開催は楢葉町高久第八応急仮設住宅の談話室で行われたもので、私がここに何うのは二度目となります。前回来たときは、平成二十六年十一月に発生した長野県北部の地震で避難されている方々に送るために折鶴をつくりました。今回は、浜○カフエの皆様が用意した芋羊羹と、私がお土産にと東京からバウムクーヘンを持ち込み、コーヒーやココア、ほうじ茶などの飲み物と共に提供し、二時間ほどの活動となりました。

ちょうど桜が満開の気持ちの良いお天気で、合間に談話室の外に出ると、向かいのお宅でかわいい猫ちゃんがリードを付けて日向ぼっこをしていました。私も猫が好きなので、一緒にいた飼い主の方に許可を頂いて写真を撮ったり、猫ちゃんと遊んだりしました。

浜○カフエのスタッフの方に聞いたところ、ここの仮設住宅は初めから、ペット同居可と

いう事で始まっていて、初期の頃の印象では、他の仮設住宅よりも多少雰囲気が出るかったということでした。

東京に避難されて都営住宅などに入られた方は、ペット不可の物件であったためにペットを施設に預けている方も多くいらっしゃいます。その施設の方と対談をした時にも感じましたが、ペットと共に生活されている方々にとっては、ペットは家族です。そのペットが同居できないということは、災害によるいろいろな悲嘆に、更に、ペットと一緒に住めなくなるという悲嘆が訪れることとなります。逆に、一緒に住むことができれば、アニマルセラピーといものもあるように、ペットによって癒され、他よりも多少雰囲気が明るかったということも理解できます。

いわき市には、もともとのいわき市民の方の仮設住宅や、今回の楢葉町など原発の影響などでいわき市以外から避難された方々もいらっしゃると思います。仮設住宅は地域ごとになっ



いわき市内の仮設住宅での浜〇カフェ。

ていますが、急激に人口が増えたために公的サービスや医療などで対応しきれないことによる問題があるようです。

また、私のようなボランティアで行く者や、原発作業の方々などでホテルも満室の所が多く、今回は前日の夜、日立市に泊まりました。

震災から四年が経過し、様々な意味でそれまでとは異なる状況が続いており、仮設住宅から新たにいわき市に住宅を建設される方もいて、震災後、行政や人々の心、周辺を取り巻く環境が変化し続けているように感じました。

なりた じゅんきょう 東京教区玉川組 感応寺住職

昭和50年1月、世田谷大吉寺に生れる。平成13年より感応寺住職

平成22年浄土宗東京教区青年会会長。平成24年東京浄土災害対策委員長

平成26年関東ブロック浄土宗青年会理事長（現職）



左端が成田師。震災以来、浜〇カフェを応援し続けている。



小説
快僧渡辺海旭

壺中に月
を求めて

前田和男

第五十九回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

いざ、博士号取得へ3



天逝の学僧・笠原研寿の素志を継ぎ 普賢行願讀に取り組む

ドイツはストラスブルクの地に留学して足かけ六年になる明治三十九年（一九〇六）の春のある日のこと——。前年に盟友萩原雲来が帰国して以来、折にふれ主任教授のロイマンより博士号の取得を促されていた渡辺海旭は教授の研究室を訪ねると、教授から二十年以上も前の黄ばんだ新聞記事を見せられた。それはロンドン・タイムズ紙の追悼記事で、寄稿者はヨーロッパ随一の梵語学者フリードリヒ・マックス・ミュラー、追悼されているのは彼の日本人門下生の笠原研寿だった。笠原は明治九年（一八七六）、南条文雄と共に、既成仏教界ではいち早く教団近代化に取り組んだ浄土真宗大谷派から海外へ送り出され、ミュラーに師事して英国はオックスフォードで研鑽を重ねたが、志半ばで結核に冒されて六年で帰国、翌年に惜しまれながら短い生涯

を閉じた。

海旭はミュラーによる切々たる追悼文を中途まで読むと、やおら顔を上げ、大きく嘆息して言った。「ろうがい労咳でやむなく帰国する途次にセイロンにしばしとどまり、当地の高僧と南北仏教の相違について大いに論じ、そのせいで故国に戻ると病状はさらに重篤になったとありますが……病魔ものかは、最後まで仏教研究者であろうとしたカサハラ師はまさに仏僧の鑑かたみです……それに比べると私などはまだまだ修行が足りません」

「そう思うのなら——」とロイマンは身を乗り出した。「同じ日本の仏教徒の後輩として、ぜひともカサハラカサハラのやり残したことを引き継いではどうかね」

海旭は怪訝な顔で訊き返した。「カサハラ師のやり残したことは？」

「ここを見給え」ロイマンは大きくうなずくと、記事を指さして読み上げた。「カサハラはいくつかの草稿を残して去り、私はその公

刊の手伝いをしたいと強く望んでいるが、多年にわたる蛍雪も、ついに実を結ばぬと思うと痛ましい。——ミユラーはそう記しているが、仏教術語集『ダルマサンクラハ』に関するカサハラカサハラの論考は彼の尽力でなんとか公刊された。しかし、多くはミユラーが危惧したとおり現在まで日の目をみていないのだ」

「たとえば……？」と海旭は問いかけた。

「実は——」とロイマンは答えた。「四年前、君が取り組んだ普賢行願讃の同定検証もかつてカサハラカサハラがやろうとして未完となった研究だった。どうだね、ドイツ語で博士論文にまとめてみないかね。カサハラカサハラの遺業を引き継いで」

海旭は深く息を吸い込んだ。「わかりました。ロイマン先生。カサハラカサハラ師の仕事をぜひ私に引き継がせてください」

ロイマンは海旭の手をとると固く握った。「私も協力するから、公刊物にもしたい。後世にも役立つように」

海旭も手を握り返した。「これで泉下のミユラー先生にも喜んでもらえるでしょう」

海旭は翌日から、四年ぶりに「普賢行願讃」の梵語、ネパール語、チベット語などの写本原本を対校する根気のいる作業に寝食を忘れて没入した。しかし、ようやく暑気もおさまり心地よい秋風が吹くなか、メドが見えてきたところへ、故国から悲報が届いた。母親トナトナが逝ったというのである。享年五十一。心配ばかりかけてきた母親にせめて博士号を手土産に再会することを励みにしてきただけに、海旭はにわかに博士論文に手がつかなくなった。

早すぎる死で思い知る 母の愛と献身

海旭は、母の早すぎる死を報せる妹からの書状を読み終えると、目頭をおさえ、日本のある遙か東の方角に向かって合掌すると、深くため息をつき、しばし母親のことを想った。

母親の献身的な下支えがなければ今の自分はなかつたとの感慨がどっとこみあげてきた。

それを初めて身に染みて自覚させられたのは、四半世紀も前の明治十四年（一八八一）、海旭九歳の時だった。近所の商店の手間仕事をあれこれし少ないながら稼ぎを家に入れて、夜は府立庶民夜学校へ通って三年になろうとしていた。年の瀬も押し迫つたある日、夜学校を終えて帰宅すると、父親の啓蔵から話があるからと呼ばれ、いきなりこう切り出された。

「お前は来年から、お寺の子供になる。そのために、お前を抜嫡する」

「抜嫡がどういことがかわるかい」と父の傍らで、母親のトナが心配そうに口を添えた。「とうとう父上の商売がだめになってね、お前をこの家に置いておくことができなくなつたのだよ。お前は徳川士族の子だから、いいかい、ここはこらえて頑張っておくれ」

覚悟はできていたものの海旭にはたつた一

つの不安があり、それを口にした。「父上、母上。私は、お、お寺の子になります。な、なりますが、学校はどうなるのでしょうか？」海旭がそう不安をもらしたのには根拠があった。実は、三年前から通っている、浅草区立戸田小学校付設の庶民夜学校が今年で廃止になるからだった。

「そのことだったら、父上に感謝をなさい。学校には行けますよ。それも夜の学校ではなく、昼間の正規の小学校にですよ」とトナは請け合つて続けた。「父上の商売仲間のついで、商家へ住み込みの丁稚になるという口はいくつかあつたけれど、どうしてもお前には勉強を続けさせたい、母もそう願つて、父上にお願いをしたところ、お前を学校に通わせてくれるというお寺さんの知り合いがいて……」

しかし、後になってわかつたのだが、海旭が学業を続けられたのは、父親ではなく母親トメのおかげであつた。渡辺家の窮状を救う

「口べらし」として、海旭少年が預けられた先は浅草区は松清町(現台東区西浅草一丁目)にある萬照寺だった。渡辺家には、小石川にある名刹、源覚寺の住職・端山海定に伝手があり、相談したところ、住職に新任したばかりでまだ後継を育成する余裕はないが、とりあえず自分の知り合いの萬照寺で預かって、小学校にも通わせてもらえることになったのである。

風呂敷包み一つで萬照寺へ身を寄せることになった海旭は、それでも学校に通えるのが半信半疑で、住職にただした。「ほ、本当に、学校へ行かせてもらえるのですか」

住職は「大丈夫だとも」と請け合ってから訊き返した。「しかし、なぜ心配するのかね」「ご、ご住職。だって月々、五十銭もとられるそうではないですか。ご、五十銭といたら、そば一杯が八厘だから、毎日一杯食っても、ふた月は食べ続けられます」

住職は苦笑を漏らした。「そんな計算がで

きるとは、お前はなかなか利発だ。学校の授業にも十分についていけるだろう」

政府は初等教育の整備にかかっていたが予算が足りず、当面は父兄に高い授業料の負担を求めたため、庶民の子弟たちには学校は高嶺の花だった。海旭が礼をいうと、住職はこう付け加えた。「お礼なら海定和尚に言え。いや母親に言え」

きよとんとする海旭に住職はこう説明をした。海定和尚のもとを母親が訪ねてきて、家庭の事情を説明、息子はとても利発なので、親としては何とか学校へ行かせたいといって、十錢玉がぎっしりつまった信玄袋を差し出し、これを海旭を預かってもらう先に授業料代として渡してほしいと哀訴した。聞くと、海旭が生まれた日からそれこそ爪に火を点すように溜めたものだという。海定は母親の思いにほだされて、「お気持だけいただく。息子さんの授業料は私が出させてもらう」と請け合ったというのである。

いつも「お前は徳川士族の出だから……」が口癖で煙たかった母親だが、海旭は母トメの深い愛を知って心中で合掌した。

それから五年後、海旭は約束通り萬照寺から端山海定に引き取られ、小石川初音町の浄土宗の名刹・源覚寺で、住職の端山海定のもとで得度、俗塵の世界から聖なる僧の世界へと転籍した。明治二十年（一八八七）。海旭十五歳の春だった。

今から思うと、そこから現在の寄宿地ストラスブルクへの道はほぼ一直線だった。

海旭が得度した同じ年、宗門は教育制度の大改革に乗り出す。廃仏毀釈による伝統仏教界の壊滅的打撃に強い危機感を抱いていた宗門トップの福田行誠の、ひとり宗門だけでなく全仏教界の未来を担える人材よ出でよとの強い思いによるものだった。

全国を東京、京都、名古屋、長野、東北、中四国、九州の七教区（後に大阪を加えて八教区となる）にわけるとともに、それぞれに

浄土宗学支校を設立、さらに支校修了生に對してより高度な教育をほどこす浄土宗学本校を東京に設立。授業内容は、支校は小学校上級と尋常中学校の学科課程に同等、本校は当時の帝国大学と高等学校を併せた高いレベルにあった。海旭は海定の推挙をうけ、浄土宗学東京支校へ入学が許され、その後は本校へ進んで優等で卒業すると、宗門の輿望を担って今こうして印度学を中心である異郷の地で博士号をめざしているのだった。

（この項つづく）

トルコと日本

友

好

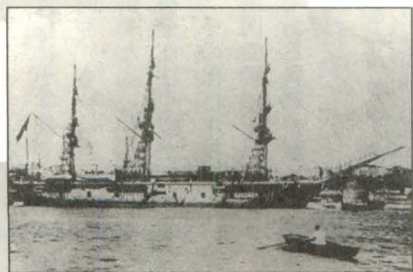
の

絆

2

森清鑑

第一回



エルトゥールル号の遭難 日本への遠洋航海

一六〇九年千葉県御宿沖で遭難した、スペイン（ヌエバ・エスパニーヤ、メキシコ）の大型帆船サン・フランシスコ号救助から始まるメキシコとの友好の絆。それと同様の事例が日本とトルコの間にも存在する。どちらも地元住民による、献身的な救助、介護に端を発する。一六〇九年から、二百八十一年後の一八九〇年（明治二十三年）。トルコの軍艦、エルトゥールル号が、台風に遭遇し、和歌山県串本沖で沈没。友好のため、はるばるやってきた多くの人材が失われた。

友好の始まり

小松宮彰仁親王と頼子妃の初のイスタンブール訪問が一八八七年。当時のオスマン帝国は手厚く持てなす。翌年、明治天皇は、それに対する礼状と漆の器をオスマン帝国皇帝、

アブデュルハミト二世に献呈。さらに翌年、日本の勲章を奉呈する。これに応えて、皇帝は明治天皇に最高級の答礼をするため、ただちにオスマン帝国海軍の派遣を決定する。こうして一八八九年七月十四日、旗艦エルトゥールル号がイスタンブールを出港。使節団長は、オスマン・ベイ大佐、艦長アリ・ベイ、海軍士官など約六百名が乗り込む。

同艦は、一八六三年建造の大型帆船だが、英国で六百馬力の蒸気機関を装備。巨大な三本マストに帆を張り走行。風のないときには、産業革命の産物でもある、蒸気機関を稼働し、力強く走行する。その優美で迫力ある姿は、当時の人々の目を奪った。

だが、建造後、活躍の場がないまま、エルトゥールル号は、トルコ金角湾に碇を下ろしたまま、二十六年が経ち、船体はあちこち傷んでいた。出港に先立ち、船大工や技術者が総点検。長い航海に耐えうる船体ではないとの結論を出す。しかし、日本への早期答礼を

重視した国王は、応急処置を施したまま出港させたのだった。

エルトゥールル号は、スエズ運河を通り、紅海を抜け、アラビア半島を廻ってインド洋へ、インド、サイゴン、シンガポール、そして日本へのルートを取った。

まずスエズ運河で最初の事故が発生した。これはできたばかりの運河で、船底が浅瀬に乗り上げたのである。しかし、この時には、燃料の石炭を初め、重いものを船から一端下ろし、事なきを得た。だが、次に対向船を避けようとして舵が破損。結局、この修理に二ヶ月を要する。

運河を無事通過し、インド洋を順調に航海。インド、ボンベイでは大歓迎を受ける。なにしろ、十五万人の人が乗船し、美しい船体を賛美したという。

だが、セイロン島に向かう途中、突然、浸水事故に見舞われる。船員は、必死で水を掻き出し、応急処置を施し、やっとのことので、

シンガポールに到着する。同船は、ここでも大歓迎を受ける。これを期に、修理を施す。四ヶ月。結局、都合六ヶ月も修理に費やし、四月末に香港着。そして長崎港に到着したのは一八九〇年（明治二十三年）五月二十二日のことであった。それから一月後の六月七日、同船は、神戸経由で横浜港に到着した。この大航海の成功で、司令官オスマン・ベイ大佐は提督に昇進、オスマン・パシヤの称号を受ける。

歓迎

横浜埠頭では盛大な歓迎式典が待っていた。大勢の人々の中には、この船旅のきっかけとなった、小松宮彰仁親王の姿もあった。

横浜で一息ついた後、オスマン・パシヤ司令官と一行は、開通間もない東海道線に乗り込み、東京へと向かう。車内では、日本人客との心温まる交流があり、やがて列車は、新橋に着く。ここから明治政府の案内に従って、

鹿鳴館に行く。そして数日、鹿鳴館で歓迎式典を受け、いよいよ皇居へと赴く。これこそが今回の長途航海の目的。

皇居では、明治天皇、昭憲皇太后をはじめ、皇族揃って参加し、大歓迎を受ける。明治天皇は、まず長旅の労を謝し、これを機に、今後、両国の国交が盛んになることを宣言。これに依えて、オスマン司令官は、アブデュルハミト二世からの明治天皇宛ての親書を渡し、トルコ最高栄誉勲章を奉呈。小松宮殿下が間に立った、皇室外交が成立する。これまで、両国の間に正式な国交はなかったが、両国の親しい関係の始まりとなった。

帰国

全ての役目を終え、オスマン司令官一行は、再び東海道線に乗り、横浜に戻る。当時の新聞は、「トルコの水兵は品行方正で他国水兵とは異なる」と讚えている。横浜では連日、民間人との交流が行われ、親密の度はさらに

増す。しかし、帰国を目指して、いざ出港としようときに、トルコ船員がコレラに罹病する。これに対処するため、当時の横須賀消毒所をはじめとする日本の関係機関は、懸命な処置を施したが、最終的に船員十二名が命を落とすことになった。

途中、六ヶ月に亘る、船の修理。そして日本に来てからのコレラ騒動。航海スケジュールは、大幅に狂い、最早、台風到来の季節になつていた。船体の傷みをよく知る、オスマン司令官は、危険を回避すべく、エルトゥール号と船員を別々に帰国させる旨、本国に上申したが、事情を知らない本国はこれを却下する。

日本政府もいたく心配し、「これから台風期に入る。何時襲われるとも分からないので、台風期が過ぎるまで日本に滞在し、その間に、船の万全の準備を整えるよう」、強く勧告する。しかし、司令官としては、本国の指令に逆らうわけにはいかない。悩んだ末に、エル

トゥールル号は、一八九〇年九月十五日、横須賀を出港。帰国の途に着く。

遭難

出港当日は、雲一つない快晴。穏やかな風を帆に受けて、太平洋を西へと、順調な航海。遠方に富士山の美しい姿を見、船員一同大満足。

この穏やかな気象が突然変化し始めたのは、翌十六日の午後からであった。あれよ、あれよという間に、風向きが変わり、波が大きなうねりへと変化し、同船は、暴風雨に翻弄されることになる。すでに辺りは暗くなり、風音は唸りを上げ、雨が甲板をたたきつける。さしもの大型船も何十メートルもの波に持ち上げられては、波底へと引きずり込まれる。船員達は恐怖におののきながらも、必死に水を掻き出す。船は一体どこにあるのか、皆目分らないが、オスマン司令官は、横須賀に引き返すか、神戸港に逃げ込むか模索する。

神戸に行こうと決断したときだった。轟音が響く。何事かと甲板に急行すると、足の踏み場もない。なんと、太い柱がころがっている。三本のマスト全てが折れていたのである。けが人も出ている。こうなれば、蒸気機関に頼るしかない。フルパワーで石炭を込め、嵐の中を突き進む。しばらくして、船体を揺るがす衝撃を受ける。船が岩礁に乗り上げたのである。その時、蒸気機関は水蒸気爆発を誘発、大爆発を起こす。船は破片となり、沈没。船員六百名が漆黒の海に投げ出され、のみ込まれる。時刻は二十二時半頃、絶望的な悪夢。その場所は、和歌山県串本沖、紀伊大島樫野崎灯台（現串本町）の近くであった。

【参考文献】

「エルトゥールル号の遭難」寮美千子著 小学館

「明治の快男児トルコへ跳ぶ」山田邦紀、坂本俊夫著 現代書館

「トルコ世界一の親和国」森永義著 明成社

その他

甦る江戸の技

文／真山剛

台徳院殿靈廟模型

エリザベス2世女王陛下から増上寺へ

徳川家光が祖父徳川家康のために造った日光東照宮は日本を代表する建築物だが、その見本となったのが同じ家光が父二代将軍秀忠のために造った芝増上寺の台徳院殿靈廟だ。日本を代表する国宝建築物だったが第二次世界大戦でそのほとんどが焼失、しかしその精緻な模型が英国王室に残されていた。

1910年、日英博覧会への東京市の出品作品で、日本を代表する彫刻家高村光雲が主に監修、柱や梁の細工や彩色、一枚一枚作製した屋根の銅板など、まさに江戸初期の建築のさまざまな分野のブロの技を甦らせた「十分の一スケールの実物」である。その模型が徳川家康公没後400年にあたる今年、増上寺に運ばれて一般公開されている。エリザベス2世女王陛下から長期貸与されたこの国宝級文化財の一般公開までを追ってみた。

1632(寛永9)年、徳川二代将軍だった秀忠が他界し、台徳院殿興蓮社徳譽入西大居士という法号(戒名)がつけられた。三代将軍家光は父である秀忠のために、そして権力を示すためにその位牌を祀るための御霊屋、靈廟を建立した。靈

廟の本殿の建築を取り仕切ったのは、後に幕府の作事方大棟梁となる甲良宗広。秀忠から徳川家との縁をもった甲良家は秀忠の正室、崇源院殿の靈牌所(鎌倉建長寺に現存)建築から始まり、この台徳院殿靈廟、日光東照宮、そして江戸城天守閣



公開前のテープカットは英国ロイヤル・コレクシヨン・トラストのディレクター・ジョンサン・マーステン氏、駐日英国大使のティム・ヒッチェンス氏などの英国関係者と徳川恒孝氏などによって行われた。(写真提供 増上寺)

という家光が自らの権威を天下に知らしめるための建築物を手掛けている。

全国の神社仏閣を回っているとその建築物の由緒書きに徳川家光の名前が頻繁に出てくる。浄土宗の総本山京都知恩院の三門もその一つだが、家光は徳川家の権威を示すために全国の主要な神社仏閣の改築や建立をしている。中でも台徳院殿霊廟は將軍を祀る建物である、全国津々浦々から最高の人材と最高の材木や金、漆などの材料が集められて造られたものであり、それが日光東照宮へと引き継がれているのである。

最高傑作ともいえた台徳院殿霊廟は国宝になったものの、1945（昭和20）年5月の東京空襲で灰塵に帰してしまふ。読者の中には戦前に増上寺を訪れ、その姿を目にされた方もいるだろう。その姿は奈良文化財研究所が所蔵する写真で見ることができ、今回の模型は実物を丹念に調べ10分の1という建築模型としては非常に大きなスケールで明治時代に製作されたのである。

日英博覧会に向け高村光雲などが監修

今回日本に戻ってきた模型は1910（明治43）年5月14日から10月29日までロンドン市ホワイトシティ区で開かれた日英博覧会に東京市が出品したもので、日本からは浮世絵180点を含む絵画351点、金工576点、漆101点、染織69点、彫刻42点、そして建築模型13点の全1116点が出品されている。日露戦争に勝利した日本がこれで欧米の仲間入り、と国威盛んな頃で、どのジャンルでも超一級品という作品が出品された。建築模型ではこの台徳院殿霊廟のほか金閣寺の模型も出品されているが、金閣寺の模型のその後の行方は定かではない。

さて、台徳院殿霊廟模型はそのスケールの大きさから日本で各部分を製作し渡欧、会場で組み立てられた奥行6メートル、幅4メートル、高さ1.8メートルという超大型の模型である。製作には高村光雲や古宇田実が監修にあたった。光雲は1877年、日本国内で開催された第一回内国勸業博覧会に師である仏師・高村東雲の代わりに白衣観

音を出品、最高の賞である竜紋賞を受賞している。あいにく神仏分離令で仏像を彫れなくなり、江戸で一、二といわれた仏師・高橋法眼鳳雲の孫弟子でありながら仏師ではなく木彫作家となったが、皇居御造営に携わるなど日本を代表する芸術家として知られている。つまり、今回の模型は江戸初期の大工、漆塗り、瓦葺き、金具、建具、彩色職人など、伝統建築の各分野における最高の職人の技を明治初期の最高の木彫師たちが寸分違わず精密に再現、屋根の銅版も実物と同様に一枚一枚作ったという江戸時代の建築の技が息づく特別な歴史的、文化的価値の高い模型なのである。

台徳院殿靈廟と確信したコールドレイク教授

大きすぎたこともあったのか、模型は閉会後にジョージ5世に東京市が贈呈、英国ロイヤル・コレクションに加えらるることになる。そして、そのままロンドン郊外の王立植物園（キューガーデン）に移され、およそ30年も陳列され続けた。その後、永年にわたる展示から傷まないようにと解体され木箱に詰められ倉庫にしまわれ、いつしか

その存在自体が忘れ去られてしまった。

それが再び注目されたのは一本の電話だった。

1996（平成18）年、当時メルボルン大学教授だったコールドレイク氏に英国文化財保存財団から電話があった。「英国のロイヤル・コレクションを保存する倉庫整理中にどうやら日本の昔の建物らしき品物が見つかった。こちらに来て見てもらえないか」ということだった。日本で生まれ、幼い頃の日光東照宮の思い出から日本建築の研究者となり、江戸初期の建築物を中心に研究しているコールドレイク教授はすぐさま英国へ飛んだ。ロンドンから200キロ離れた倉庫内に積まれていた木箱に眠っていた目映い金箔の来迎柱を手にとった瞬間に台徳院殿靈廟と確信、感動で涙が止まらなかつたという。その姿を同行した妹さんが撮影した貴重な一枚が残っている。

その後、英国ロイヤル・コレクション・トラスト代表（台徳院殿靈廟模型プロジェクト・コーディネイター）となったコールドレイク教授が中心となり増上寺への里帰りが検討される。とはいえ

英国ロイヤル・コレクションは女王陛下の持ち物だけに所有権を移す訳にはいかない、そこで長期貸与となるのだが、その日本との橋渡し役となったのが、秀忠の子孫である徳川宗家第十八代徳川恒孝氏だった。

日本への長期貸与に徳川宗家が貢献

「日本に里帰りさせられるものの、当初は英国の倉庫からの運送費用は日本持ちというのが条件でした」と徳川宗家第18代当主徳川恒孝氏は当時を振り返る。嬉しい話ではあるものの大きさも重さも、その価値もまだよくわからないものを運ぶのは難しい。だが、永年勤務していた日本郵船株を退職して間もない頃だったこともあり、一緒に働いたことのある社長に相談、役員会議にもはかってもらい日本郵船株が船便で運搬を請け負うことになったという。だが、事態はある日、一変する。ロイヤル・コレクションの管理運営をしている英国ロイヤル・コレクション・トラストが費用を持ち、模型を増上寺まで運搬するという事になったのだ。恒孝氏はその理由をこう推測する。

2008（平成20）年にチャールズ皇太子が来日した時に模型の一本の来迎柱を持参し、「これは日本にとつて大切な宝物ですから日本にあるべきで、いつか模型全体を里帰りさせる日のための証と致しましょう」と話している。数年後、皇太子が例の模型を日本へ戻したかと確認したところ、運搬費用で折り合わずまだ英国にあるとの答え、それでは自分が言ったことが嘘になると一喝、急遽船便どころか航空便での運搬となったのは、ということだ。あくまで推測だが、王室の変わりぶりから、相得的を得た推測のように思える。

また、コールドレイク氏は航空便になった理由をこう説明する。「航空便にしたのは増上寺の徳川家康公没後400年の記念事業に間に合わせた」との要望があったからです。また、模型の胡色彩色を考慮すると、船便で酷暑の中東を経由すると溶解の恐れがあること。日英両国の専門家がこうした相談を重ねた結果です」

徳川家康公没後400年記念事業の目玉に
さて、実際に模型が増上寺に里帰りしたのは2

014（平成26）年4月3日だった。翌年に徳川家康公没後400年を迎え、記念行事と企画していた増上寺は一年で本堂である大殿地下一階の三縁ホールを改修し「増上寺宝物展示室」を開設し、そこにこの模型を展示することとなった。そこでコールドレイク教授とともに大きな役割を担ったのが、浅野研究所代表で森美術館学芸グループシニア・コンサルタントの広瀬麻美さんだ。広瀬さんは仕事柄、以前よりこの模型の存在を知っていたという。

「模型を実際に見てみると当初聞いていたより傷みが激しく修復と展示方法、ホールの改修という三つの仕事のせめぎ合いで進めましたが、展示方法とホール改修については、森美術館の展示デザインチームと一緒に取り組みました。また、模型の展示とともに増上寺寺宝の五百羅漢図を展示するので、照明を始め工夫を凝らしてあります」

里帰りから一年、今年の4月1日、一般公開の前日にプレス発表に続き、秀忠公のご回向、そして関係者への事前公開があった。テーブカットに

も加わった徳川恒孝氏が展示室で感心したのが、本殿の屋根が鉄杵で持ち上がっていて本殿内部の装飾が見られる、という展示方法だ。広瀬さんによると、屋根だけで200キロもあり、修復しても既存の柱だけではとても支え切れないことからアイデアだという。ちなみに今回の修復には日光東照宮の陽明門の修理を行っている小西美術工藝社があたっている。やはり江戸、明治に続いて平成でも最高の職人が携わっているのである。

無事公開となった台徳院殿靈廟模型だが、実はまだ時間と費用の問題もあり、未修復の部分がだいぶ残っているという。おそらく入場料の一部は今後の修復費用にも充てられると思うので、この国宝級の文化財を完成させるためにも多くの拝観者が訪れることを祈念したい。というよりも、江戸時代の建築の技を今に伝えるこの台徳院殿靈廟模型、一見の価値は十二分にある。

百聞は一見に如かず、ぜひ大本山増上寺宝物展示室に足を運んでいただきたい。（ルポライター）



浄土誌上句会

●時計

〔特選〕 やわらかきダリの時計のある日永 松下 彩乃

シニールレアリスト、ダリの絵に、時計が卓から半分垂れていたり、ぐにやりと木に掛かったのがあるが、多分そういう絵からの発想だろう。取り合わせた季語がぴったり合っていて、面白い句になったと思う。

〔佳作〕 日時計の影がぼんやり鳥雲に

太田 俊尋

入学子びかりと光る腕時計

安藤 要

日時計の指針の影の濃き立夏

浜口 佳春

●動画

〔特選〕 空爆の動画葱坊主が太る

齊田 仁

「動画」は「アニメーション」で通用している。「空爆」は、数十年前の記憶を思い起こさせるものでなく、大方は未来のものだ。句

の下半で取り合わせている「葱坊主」がよく利いていて面白い。

〈佳作〉

五月人形飾りて動画見る子かな

佐藤 雅子

白黒の動画の蝶がひらひらす

長谷川 裕

夜桜や動画のごとき川の彩

井村 善也

●自由題

〔特選〕
尻振つて都電が曲がる遅日かな 和田 塵風

東京都としては、現在ただ一本の路面電車である。通つて行つたあとを振り返ると、尻を振るように揺れている。珍しい情景ではないのだが表現が面白い。「遅日」を持つて来たのも、句をゆつたりさせている。

〈佳作〉

替え歌に正調のありいかのぼり

佐々木美冬

柿若葉猫がのっそり顔出しぬ

山口 信子

花見の苑よちよち歩きの子が主役

石原 新



誌上句会 (編集部選)

■時計

腹時計空回りして花見時
善行の誉れや春の置時計
街中の時計が春の時刻かな
時計屋に階段のある朧かな
リヤカーの董のつくる花時計
三月十日柱時計がぼんと鳴る
小人出すからくり時計春の昼
春埃時計の時給考える
日時計の影がぼんやり鳥雲に

■動画

花散らす風に音なき動画かな

- 佐藤雅子
- 飯島英徳
- 井口 葉
- 小林苑を
- 工藤 掉
- 斉藤ふみ
- 鳥羽 梓
- 笠井亜子
- 太田俊尋
- 浜口佳春

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

古庭自由題

締切・二〇一五年六月二十日
発表・『浄土』二〇一五年九月号
選者・増田河郎子(「南風」主宰)
応募方法

●いづれの題とも数の制限はありません。
●特選各1名・佳作各3名
葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。
宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-1-7 14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

ひきがえる微動だにせぬ動画かな
蝶々のやがて羽ばたく動画かな
動画にて春の小樽を送信す
奥飛驒の蝌蚪の動画を添付せり
ほのぼのと動画のなかの蟹気楼
泣き笑う卒業式の動画なり
遅き日の動画の中をよぎる耳

■自由題

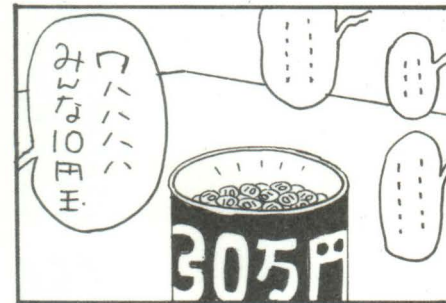
路のとう香を放ちおり刻みおり
たつぷりと濡らして春の地蔵かな
碎水船のごと菜の花の中を行く
黒猫のすり抜けるときはこべ踏む
傘さして啓蟄の穴覗きおり
花粉症歴四十年の大きくしゃみ
黒々と地蔵を濡らす春の水
春の雨軒の電球昏き店
踏み出せば沈丁の香はふと途切れ
吊り草の一斉に揺れ春寒し

- 笠井亜子
- 大森吾郎
- 内藤廉人
- 山下友里江
- 湯谷朱美
- 今井陽子
- 月島恭子
- 佐藤雅子
- 工藤 掉
- 鳥羽 梓
- 長谷川裕
- 山内桃児
- 水嶋裕之
- 横山富美子
- 染谷隆三
- 今西瑠衣
- 飯田香菜

さっちゃんね

かまち♡ひろう

120 かい目



かまちひろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)

編集後記

著い空命（ぬち）どう宝を伝えけり

岱潤

七十年前の四月一日、米軍はその圧倒的戦力をもって、嘉手納正面に上陸を開始する。上陸部隊の北半分はその後北上して国頭地区に進撃し、南半分は南下して首里方面に進撃した。迎え撃つ日本軍は四個師団、五個混成旅団を基幹とする三十二軍。強力な兵力を持ちながらも、当初の主眼は「皇土防衛と南方圏の交通の確保」。ここで考えなくてはならないのは当時、沖繩は皇土ではなかったことである。沖繩防衛軍と大本営は意思統一を欠き、戦後も本土防衛の捨て石とされた沖繩に大きな禍根を残す結果となつて

いる。現在牛島司令官が自決した六月二十三日を「慰霊の日」としているが、沖繩戦の悲劇は、終戦の八月十五日でもなく、三十二軍が米軍の降伏文書に調印した九月七日まで続いた。

六月六日豊見城の海軍司令部にて最期を迎えた大田司令官は、自分が本国に通信できる最期の人間と思ひ、沖繩の老若男女すべての人々の献身的な戦闘への働きを讃え、沖繩の将来を憂い切実なる電文を送り、その最期に、「沖繩県民かく戦えり、県民に対し後世特別の御高配賜らんことを」と結んでいる。七十年が経過した今日、米軍基地の辺野古への移設が、沖繩県民が総意で反対を表明してい

るにもかかわらず、政府には沖繩の基地軽減という選択肢はなく、聞く耳を持たないでいる。沖繩の悲劇はまだ続いている。
(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

浄土

八十一巻六月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十七年五月二十日

発行 平成二十七年六月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四丁目四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三五七八六九四七

FAX 〇三三五七八七〇三六

振替 〇一八〇・八・八二二八七

雑誌『浄土』

特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 巖谷勝正(目黒・祐天寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 大江田紘義(仙台・西方寺)
 加藤昌康(下北沢・森巖寺)
 熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
 桑原恒久(川越・蓮馨寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤成順(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光圓寺)
 東海林良雲(塩釜・雲名寺)
 須藤隆仙(函館・称名寺)
 高口恭行(大阪・一心寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多義敬(両国・回浄院)
 真野龍海(大本山・清浄華院)
 朧博之(網代・教安寺)
 水料善隆(長野・寛慶寺)
 (敬称略、五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

法然上人鑽仰会 講演会のお知らせ

日本を代表する二つの知性が語り尽くす

「現代に生きる法然上人」

梶村昇＋阿満利麿

6月19日（金）

午後2時～4時

大本山増上寺[慈雲閣 1Fホール]にて

一般1,000円 当会会員無料

梶村昇（かじむらのぼる） 亜細亜大学名誉教授
主な著書

- 『法然上人とお弟子たち 乱世を生きる同信の世界』（浄土宗 浄土選書 1998）
- 『法然の言葉だった「善人なをもて往生をとぐいはんや悪人をや」』（大東出版社 1999）
- 『法然上人をめぐる関東武者 3 津戸三郎為守』（東方出版 2000）
- 『聖光と良忠 浄土宗三代の物語』（浄土宗 浄土選書 2008）
- 『法然上人伝』（大東出版社 2013）

阿満利麿（あまとしまろ） 明治学院大学名誉教授
主な著書

- 法然の衝撃 日本仏教のラディカル（人文書院 1989）
- 仏教と日本人（ちくま新書 2007.5）
- 選択本願念仏集－法然の教え（角川ソフィア文庫 2007.5）
- 日本人はなぜ無宗教なのか（ちくま新書 1996）
- 人はなぜ宗教を必要とするのか（ちくま新書 1999）
- 法然を読む「選択本願念仏集」講義（角川学芸出版 1999）
- 行動する仏教－法然・親鸞の教えを受けつぐ（ちくま学芸文庫 2011.8）
- 法然入門（ちくま新書 2011.8）

お問い合わせ先 法然上人鑽仰会 TEL：03-3578-6947

ほとけの
慈悲は
いつの世にも
誰のもとにも



石丸晶子先生の
本誌連載小説『法然上人を巡る人々』が
文庫本となりました。

法然。その光に出逢い、闇をこえ、
“あたらしいのち”に生きた
貴族、武士、庶民たちの物語

月影の使者 上 下

●浄土宗出版 上下巻とも本体730円＋税

【問合せ・お求め】 浄土宗出版

〒105-0011東京都港区芝公園4-7-4

TEL:03-3436-3700 FAX:03-5472-4878 <http://press.jodo.or.jp/>